

社員は家族の一員、
そして財産

株式会社ナカテック

代表取締役

中山 浩行 氏

トップの

The president's real face

素顔

vol.13

Profile

昭和37年福井市生まれ。大阪の中堅大手鉄工所を経て、中山鉄工所(株)(現(株)ナカテック)に入社。平成3年取締役役に就任。平成15年5月代表取締役に就任。

福井商工会議所サステナブル社会・環境委員会の委員長の他、福井県機械工業組合理事長、福井県中小企業団体中央会副会長などの公職を務める。

DATA

創業：昭和33年
電話：0776-51-1666

本社所在地：坂井市春江町藤鷲塚37-9
従業員：138名（グループ全体：350名）

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は(株)ナカテックの代表取締役を務める中山浩行氏にお話をうかがいました。

「家族が一体で働く姿

昭和37年福井市照手で鉄工所を営む家庭の長男として生まれる。20坪ほどの工場内の事務所が「自宅」という環境だった。その後、父の常義氏が福井市新田塚に250坪の新工場兼自宅を設立して移転。規模は大きくなったが、照手に有った家族が集えるような居場所は無くなった。代わりに住み込みの社員と共に食事をしたり、障がいを持った社員とも触れ合う機会が多くなり、「社員は家族の一員、そして財産」という概念が芽生えていった。

時代は高度成長期で、家業の鉄工所は両親・祖父母が一体となって機械の部品加工や組み立て、メンテナンス業を営んでいた。技術者の父は「会社を大きくしたい」という一心で昼夜を問わず働き、母も金庫番として懸命に支えていた。小学校高学年になると家業の手伝いに駆り出され、厳しい父の下で技術を磨いた。中学の頃には簡単な溶接や部品の洗浄などを担当し、工作

や凶工の授業では、先生も唸る程の腕前まで技術レベルは向上していった。

「家族の役に立ちたい」

ところが、順調に思えた家業をオイルショックが襲う。高校時代のある日、学校から帰宅すると父が暗い工場で立ち尽くしていた。「明日の仕事が無い。会社が大変なことになるかもしれない」。父の憔悴ぶりにかける言葉もなかった。食事の会話といえど「どこそこの会社が倒産した」「うちの資金繰りは」という辛い話題ばかりだった。この試験を乗り越えるのに、自分が出ることは何かを自問自答する日々。出した答えは「自活」だった。家計を助けるために、アルバイトは何でも手を付けた。中でも早朝の新聞配達は体に堪えたが、「家族の役に立ちたい」その一心で進学や就職で福井を離れた後も家族への仕送りを続けた。

「家族の絆と家業を継ぐ思い」

大阪の専門学校を卒業して、近隣の中堅金属加工会社に入社。その頃は汎用機全盛の時代。職人の腕が機械加工の精度を支えていた。工場には数十種類



創業50周年を記念して作られたポスターには思い出のシーンが数多く掲載されている。

わっていたが、入社から数年後には機械の自動化が進むとともに工場も様変わり。福井に戻る頃には、機械制御による新たな設備投資の時代を迎えており、優れた人的資本だけでなく、新たな技術・テクノロジーを組合せなければ、企業を未来に導けないという現実を目の当たりにした時期でもあった。

平成3年に福井に帰り、父の鉄工所に入社。漠然と家業の承継をイメージしていた頃、両親に結婚を報告した際に思わぬプレゼントを受け取る。母親から渡された一冊の預金通帳だった。家業を助けたいとの思いで、社会人になっても仕送りましたお金を、貯め続けてくれていたのだ。両親からは「お前の人生を預かってただけ。だから『預金』って書いてあるやろ」。家業を継ぐ思いを決定づけた出来事だったが、不思議と涙は出なかった。

だが、結婚してほどなく父にガンが見つかり、余命3〜5年の宣告を受けた。鉄工所を継ぐ気持ちに迷いはなかったが、鉄工所という業態を続けることに一抹の不安を抱えていた。病床の父と最後に交わした言葉がある。「鉛筆からロケットまでが三菱なら、我が社も部品加工からエネルギー開発、ひいては国策となるようなビジネスモデルを構築したいな」。一企業では到底叶わないような新たな産業分野の構築を夢見た技術者の言葉だった。

そこで、自身なりに新たな道を模索。既存の機械部品の加工業に加えプラント施工など、産業インフラの整備に関わることで業界の活性化や、新たな技術を生み出すことにつながっていく。これが後々のナカテックグループの根幹を担うことになる。

「休日はアイデアの源泉」

学生時代から車やバイクが大好きで、今も休日はドライブで全国の温泉巡りや神社への参拝で英気を養う。一方で休日を単なる休日としてではなく、アイデアを生み出す源泉と捉え、常に新たな発見やヒントやビジネスにつながるよう心がけている。

幼い頃に父が支援していた障がい者

の就労・自立を自らもサポートしようとして、平成29年には社会福祉事業にも業務の幅を広げた。今も「社員は家族の一員、そして財産」の思いを胸に、自社を志してくれた社員を大事にして、適性に合った分野で活躍してもらおうと、現在では8つの事業分野で全国に14社・24拠点を展開するに至った。

「会社の礎を作ってくれた両親に感謝したい」と柔和な笑顔で振り返る一方で、「若手社員達には新たなフィールドにどんどんチャレンジして欲しい」とエールを送っている。



会社員時代に苦勞して手に入れたバイク(左:kawasaki Z900/中:HONDA CB750)と、伝説の名車「ケンメリ」(右)との思い出の1枚。